

「道化の華」の二つの引用

ダンテ『神曲』「地獄の門」銘文引用に関する翻訳の問題点

渡邊浩史

〔抄録〕

現在までこの「道化の華」の冒頭に用いられた「こゝを過ぎて
悲しみの市。」という一節は、ダンテの『神曲』からの引用であ
り、その翻訳としては、笠原伸生氏によって提言された森鷗外訳
『即興詩人』「神曲、吾友なる貴公子」の一節、「こゝすぎて う
れへの市に」であると言われてきた。しかし、検討の結果、実は
その翻訳は別にあるのではないか、という可能性が出てきた。
小稿はその翻訳として、上田敏訳のテキストにあるものを一番

大きな可能性とし、そこに書かれた「こゝすぎてかなしみの都へ」
と「われすぎて愁の市へ」という訳稿を太宰が「道化の華」の冒
頭に用いる際、一部改変し使用していたのだ、ということ提唱
するものである。

キーワード：翻訳、森鷗外、上田敏、ダンテ『神曲』

一、はじめに

太宰治の「道化の華」は、昭和一〇年五月一日発行の「日本浪曼派」
五月号、第一巻第三号に発表され、その後『晩年』（昭和一二・六
砂子屋書房）に収録され、「狂言の神」「虚構の春」とともに長編三部
作として『虚構の彷徨』（昭和一二・六 新潮社）に再録されている。

この作品は従来、前期太宰文学を代表する問題作であるとされてきた
だけに、多くの研究論文が書かれており、その研究状況もかなり進ん
でいると言っても差し支えないように思われる。
例えば、この作品に使用された 特異な方法 による構成に関して
は、これまでの先学による指摘で、徐々にだが明らかにされてきてい
ると言える。

島田昭夫氏は『「道化の華」』の中で、「仕組みは『僕』が作者太宰

に操作され、葉蔵たちが『僕』に操作されるといふ二重構造となる」と述べられ、木村小夜氏はこの見解を発展させ、この「仕組み」を図式化し、「道化の華」という作品世界の分析を試みている。さらに鈴木雄史氏は、この作品の「大庭葉蔵」が療養院で過ごす四日間を物語、「僕」が出没し、「君」にむかつて語る部分を語りかけと二分し、「物語」は『僕』のことばの中に引用された世界であり、語りかけが物語を包み込んでいる、と一応は考えることができる。としながらも、「この小説の独特な」点を挙げ、「そのような枠に納まりきらない」と述べている。この「特異な方法」に関するこれらの見解のもととなっているのが、太宰が川端康成宛に書いた「川端康成へ」と題した文中にある、「ジツドのドストエフスキイ論」を御近所の赤松月船氏より借りて読んで考へ、「原始的で端正でさへあつた『海』といふ作品をわずかに切りきざんで、『僕』といふ男の顔を作中の随所に出没させ、日本にまだない小説だと友人間に威張つてまはつた」といふ太宰の言葉からのものであることに疑問の余地はないだろう。つまり、この作品に対する先学の多くの研究論文は、この「特異な方法」を開示し、その上でこの作品世界をどう読み解いていくか、という方向で進んできていたと言つことができるのだ。

だが、管見によれば、まだこの「道化の華」という作品には、疑わしいと思われる箇所がいくつもある。その一つとして、冒頭にある「ここを過ぎて悲しみの市」といふ一節を挙げる事ができるだろう。この一節に関しては、ダンテ『神曲』からの引用であり、その翻訳本としては、森鷗外訳『即興詩人』のなかにある「神曲、吾友なる貴公

子」の一節であると言われてきた。しかし、この見解に疑問を持つことで、実はその翻訳者は別にいるのではないか、という仮説が芽生えてきた。小稿の目的は、この冒頭のエピソードに関して、その翻訳者を特定し、太宰が何故その翻訳本を参考にしたのかについて、考察していくところにある。

二、先行研究からなぜ、鷗外訳なのか

ところで、この冒頭の一節「ここを過ぎて悲しみの市」の翻訳として、今日まで何故鷗外訳であると考えられてきたのであるのか。

まず、『別冊国文学・太宰治事典』の「太宰治引用事典」「ダンテ『神曲』」の項で、中村三春氏がこの冒頭の一節に関しては、「ダンテ『神曲』」からの引用であることを記しているが、翻訳者については触れられていない。

だがこのことに関しては、赤木孝之氏が第一創作集『晩年』に関しての注釈事項を集めた『注釈晩年抄』の中で次のような指摘をされている。

森鷗外訳『即興詩人』（春陽堂 明35・9）のなかの一章「神曲、吾友なる貴公子」の「ここすぎて うれへの市に」ここすぎて 嘆の淵に……（引用は岩波文庫『即興詩人・上巻』昭44・2、改訂による）という訳を改変引用したものか。笠原伸生は「なぜ、大庭葉蔵か」（『信州白樺』51・52合併号）昭57・10）で、この一句に「己はいま『悲しみの市』の民になりつつあるのだと

いづような 仕掛けがある ことを指摘する。

また、笠原氏はここに引用された「なぜ、大庭葉蔵か」の「注」の中で、さらに次のような可能性も示している。

『上田敏全集』(昭4・9) 第二巻に こゝすぎてかなしみの都へ、こゝすぎてとはのなやみに、こゝすぎてほろびの民へ人はゆく (断章A稿) とある。上田訳を参照する可能性は時間的にみて充分あるが、どうだろうか。

だが、この点に関しては笠原氏も消極的に「どうだろうか」と問いかけて程度にとどめ、氏の本論の中では「ちなみに冒頭の一句は有名な鷗外訳と関連がある」と、『即興詩人』の翻訳が、「道化の華」に使われたものであると推測している。つまり、現在まではこの笠原氏の見解を基に、「道化の華」の冒頭の一節の翻訳としては、鷗外訳が使用されていると考えられていたことになるのである。

では、その他に翻訳された『神曲』についてはどうなのであるか。太宰が「道化の華」を執筆していた当時、『神曲』に関する翻訳本は他にもあつたはずである。それらの翻訳本には、可能性は無いのだから。

その点については、今回論者が調査した『神曲』関係の翻訳本から、この一節だけを抜き出したものを以下に挙げてみたので、比較してもらいたいと思つ(なお引用する翻訳は、太宰が「道化の華」を執筆するうえで見ることができたものであり、時代の古い順から挙げるものとする。また、太宰が当時見ることでできた翻訳本として、『明治大正昭和翻訳文学目録』では、山川丙三郎、古典文学研究会、中山昌樹、

竹友虎雄(藻風)、河原万吉等、生田長江、以上五者の翻訳によるものが確認できたが、論者はさらに多種のアクセスを利用して、これらの他の翻訳本も拝見することができたので、それらの翻訳も併せて以下に挙げている。

こゝすぎて うれへの市に こゝすぎて 嘆の淵に

森林太郎(鷗外)『即興詩人』(明35・9 春陽堂)

(傍線引用者、以下同じ)

吾すぎて憂の市へ、 / 吾すぎて永久の苦患へ、

高田梨雨『ダンテ神曲』(「明星」明39・3)

我を過ぐれば憂の都あり、我を過ぐれば永遠の苦患あり、

山川丙三郎『ダンテ神曲 地獄』(大3・11 警醒社書店)

我れによりて悲哀の府に入り、 / 我れによりて永遠の苦に入り、

高月譚之助『神曲物語』(大4・5 実業之日本社)

我を過ぐれば憂の都あり、我を過ぐれば永遠の悩みがあり、

古典文学研究会『神曲』(大5・12 向陵社)

我を過ぎて憂愁の都へ / 我を過ぎて永劫の憂苦へ

中山昌樹『ダンテ神曲 地獄篇』(大6・1 洛陽堂)

・こゝすぎてかなしみの都へ、こゝすぎてとはのなやみに、
われすぎて愁の市へ、われすぎてとはの痛みへ、

故上田敏 発行者 星野敬一 『ダンテ神曲』（未定稿）
（大7・7 修文館書店）及び、『上田敏全集』第一巻
（昭4・9 改造社）所収。

・われ過ぎて悲劇の市に、われ過ぎて永劫の患に、

竹友虎雄 『神曲 地獄界上』（大12・5 文献書院）

・我れを過ぎて憂愁の都へ、我れを過ぎて永遠の苦悩へ、

河原万吉等 『神曲（上巻）』（大15・12 万有文庫）

・我は悲しみの市への入口なり。われは永劫なる悩みへの入口なり。

生田長江 『神曲』（昭4・8 新潮社）

管見に入る限り、これだけの翻訳本を太宰は見る事ができた可能性を持っているのであるが、この傍線部を比較してみると、確かに「道化の華」に用いられた翻訳の可能性として、笠原氏が指摘した森鷗外訳と上田敏訳の可能性に絞られてくる事が考えられる。その理由の一番大きな点として、「こゝ」（太宰は「ここ」としているが）と二人の翻訳者は訳しているのに対し、他の翻訳者たちは、「吾」「我」「我れ」「われ」などと訳し、一人称 扱いにしていることが理由として挙げられる。

では、笠原氏は何故森鷗外訳を一番濃厚な可能性として選んだので

あるつか。その点については、再び笠原氏の論文から引用してみるとする。

ちなみに冒頭の一句は有名な鷗外訳と関連がある。こゝすぎて、うれへの市に／こゝすぎて嘆の淵に（『即興詩人』）がそれであつて、空濛の淵 は当然 嘆の淵 から連想されたものであるう。

また、この記述の最後に「注」とあるが、この「注」を見ていくと、

『即興詩人』（明治25・11）34・2、35年刊）のなかの「神曲、吾友なる貴公子」に こゝすぎて うれへの市に／こゝすぎて嘆の淵に／こゝすぎて 浮ぶ時なり」と訳されて入口に膾炙したものを太宰風に改変したのではないかと考えられる。

という指摘をされている。確かに、嘆の淵 が「道化の華」本文中に「こゝを過ぎて空濛の淵」と出てくるため、信憑性は高いと言えるのかも知れない。

しかし、これだけで本当に鷗外訳が当てはまると言えるのであろうか。例えば、氏が「連想されたもの」としている 嘆の淵 と 空濛の淵 に関しては、実際に当てはまっているのは、淵 という一字のみである。また、意味的にも、嘆 と 空濛 とでは全くつながつてはこない。そしてもう一つ、氏が論文中に載せた鷗外訳『即興詩人』「神曲、吾友なる貴公子」の引用文、こゝすぎて、うれへの市に／こゝすぎて嘆の淵に には 市、嘆 とルビがふつてあるが、実際の鷗外訳『即興詩人』「神曲、吾友なる貴公子」（明35・9 春陽

堂)にはルビはふられていない(先に論者が挙げた森林太郎(鷗外)訳の『即興詩人』を参照)。

また、森鷗外訳で不足の事態が生じる可能性についてさらに補足すると、この鷗外訳『即興詩人』「神曲、吾友なる貴公子」は、実は『神曲』という作品を純粹に訳したものであるのではない。翻訳されている部分は「地獄の門」に関しての銘文だけで、後は、全体を簡単に説明している程度であり(ほぼ感想に近く感じる)、何故「第三歌」の「地獄の門」の銘文へと到るのかについては、この翻訳本では窺い知ることが難しい。

これらの点から見ても、『即興詩人』に挙げられた翻訳が、直接太宰が参考にした可能性として挙げることは、再考の余地があろう。

三、太宰が選んだ『神曲』の翻訳本とは

それでは、太宰が参考にした翻訳本の可能性として、さらに有力なものも存在するであろうか。

もう一度、今回論者が挙げた様々な翻訳者たちによる『神曲』「地獄の門」に関する銘文の翻訳を見ていくことにしたい。この中で、奇妙な翻訳があることに気付く。それは、「故上田敏 発行者 星野敬一」となっている『ダンテ神曲』(上田敏未定稿)(大7・7 修文館書店)に書かれた翻訳と、『上田敏全集』第一巻(昭4・9 改造社)に載せられた翻訳である。これは、最初に未定稿版の『ダンテ神曲』が出版され、その翻訳が上田敏の全集収録の際に取り入れられたもの

である。

この未定稿の翻訳本に関して、多少説明をしていく。この翻訳本には、生前、上田敏が完訳することができなかったダンテ『神曲』の原稿を集め、最初の「例言」に「且神曲遺篇の刊行を図ること歳あり、今故人の三周忌に当りて印刷成るを告ぐ」とあるように、これを世に刊行することになった経緯が示されている。

さらにこの翻訳本を見ていくと、「地獄界」の「第三歌」の冒頭に「こゝ過ぎてかなしみの都みやこに、こゝ過ぎてとはのなやみに」と「地獄の門」の銘文が書き出されている。この「地獄界」は「第七歌」の途中で終わっており、その次の頁から、再び、「地獄界 第一歌」が書き出され始めている。読み進めていくと、また「第三歌」があらわれ、この冒頭には「われすぎて愁の市へ、われすぎてとはの痛みへ」とあり、訳が一部改変されている。この「地獄界」は「第三歌」の途中で終わっており、また次の頁から「地獄界 第一歌」が書き出され始め、この「第一歌」は二頁程で終了し、そこでこの翻訳本は閉じられることとなる。

これについては、「例言」に次のような説明文が載せられている。

故上田敏氏のダンテ神曲の翻訳は全篇の一小部分に止まり、而も未だ彫琢を悉さざる所多きが如しと雖も、故人の遺稿中最も重要なものとす。自筆の訳稿は三種あり、其一は主として俗語体に書綴られ、地獄界第七歌の首に至り、其二は雅文体に訳出せられ、同第三歌に終れり、其三も亦雅文体にして、稿せる所僅に第一歌の四分の一に過ぎず。今これらの三訳併せて印行に附す。

ではここで、もう一度論者が引用した、この「第三歌」の冒頭の節の傍線部を見ることにする。

最初の「第三歌」の一節は、

「こゝすぎてかなしみの都へ」

と書かれてあり、「都」の字に「まち」とルビがふつてある。

次の「第三歌」の

「われすぎて愁の市へ」

には、「都」が「市」という字に改変され、この「都」の字と入れ変えると

こゝすぎてかなしみの市へ

と、「道化の華」本文中の

「こゝを過ぎて悲しみの市」

と、ほぼ完全に近い形で一致することが分かる。「を」に関しては、太宰が「道化の華」を創作する際、場所を明示するための助詞として、組み入れたものであると考える。ちなみに、これは『上田敏全集』第一巻でも同じ形式で訳されており、全集では三種の訳稿を「A稿」「B稿」「C稿」とし、⁽¹⁵⁾ 区分けをしている。

以上の点からも見て、太宰が「道化の華」執筆時にその参考にした翻訳本としては、上田敏訳のものが可能性としては一番大きいと言つことができるだろう。

四、なぜ、上田敏訳なのか

では、なぜ上田敏訳が選ばれることになったのであろうか。その前に、太宰はこれらの翻訳本を知っていたのであろうか。特に未定稿版の『ダンテ神曲』に関しては、いかにもマイナーな感があるのであるが、その点はどうなのであろうか。

この問題に関して、まず、未定稿版の『ダンテ神曲』⁽¹⁶⁾ について調査をしていくと、この翻訳本が出版された同じ月に、当時の総合雑誌であった「太陽」第二四巻第九号（大7・7 博文館）で、宣伝されていることが判明し、⁽¹⁷⁾ それなりに脚光を浴びていたことが、その中の宣伝文から読み取ることができた。⁽¹⁸⁾

早いものでもう上田君の三周忌が近づいた。記念に出版さる遺稿ダンテ神曲も、僅に地獄篇の首めの七歌ばかりに過ぎないもので、而も未だ彫琢を経ざる粗い未定稿のまゝなものながら、知友門弟が故人を偲ぶよすがとしてはこよなきものであろう。残後の二年間に神曲の翻訳さては記述が二種ほど出で、その外、新生の翻訳も世にあらはれ、ダンテ研究の論文もちらほら見えだが、格段の希望を以て上田君の訳の出現を待ちうけて居てくれた人は少なくないことゝ思ふ。詩聖ダンテの著者として、又文藝委員会の囑を受けて神曲の翻訳を担当した斯界の泰斗として、その訳稿の如何なるものかは、多くの人々の注視を洩れぬ所であらう。

（略）

伊太利始め西洋の主なるダンテ学会などに向けても、大阪の大賀氏等の介意を得て、今度出版の訳本を寄贈して西洋にも紹介したいし、又無論我国にありても相当の範囲にこの本を頒布したいものと自分は希望する次第である。来る大正十年即ち西曆千九百二十一年はダンテの六百年遠忌に相当するから、そのをりにこの訳本は本邦に於て大に意義のあるものとなるであらう。

しかしこの当時、太宰はまだ年齢わずか一〇歳である。またそれ以降でも、この宣伝文を目にしていたかどうかは定かではない。と言うことは、太宰が見た翻訳本としては、未定稿版以外の上田訳であるという可能性が考えられる。

ではここで、もう一つの翻訳本の可能性として、『上田敏全集』第一巻に収録された「神曲」の方に目を向けてみよう。

この『上田敏全集』第一巻は、昭和四年九月三日に発行されたものであるが、発行される以前から、非常に注目度の大きいものであったことが窺える。

まず、昭和三年四月一日に発行された「改造」四月号には、次のような宣伝文が載せられている。

本全集は夙に出づべくして未だ出でざりしもの、而してこの出版の重任を本社に託されたるは本社の欣幸とするところである。我社は採算の如きを度外して優れたる内容と相俟ち、外装また善美を尽して柳村先生(19)の支持者に贈ることを誓言する。

「採算の如きを度外」してまでも、「外装また善美を尽」すことを「誓言」している。「ここからは、この全集を発行することが、改造社

にとつて非常に大きな企画となつていたことが窺い知れる。また、この宣伝文の次頁には、『上田敏全集』全体の「内容要目」が広告として載せられている。⁽²⁰⁾

この「内容要目」に目を向けてみると、この全集が「第一巻」から「第八巻」まで、発行されることを読者は知ることができる。その中で「第一巻 詩集」の欄に視線を落としてみると、「ダンテ『神曲』(未定稿)」という文字が視界に飛び込んでくる。つまり、ここでこの「改造」四月号を読んだ読者は、ダンテ『神曲』の翻訳が、これから発行されるこの全集に、収録されていることを知ることになるのである。

この全集の宣伝は、続く「改造」五月号(昭3・5)でも取り上げられている。ここでは、谷崎潤一郎が「敏先生のおもひで」という題で、永井荷風が「上田敏氏につき」という題で、それぞれ全集出版を記念する文章を掲載しており、巻末にあるこの五月号の「編輯だより」には、次のような宣伝文までが記載されている。

我文壇における偉大なる功績者上田敏全集を本社より出すこととなつた。その内容は、外装共に申分のない全集として五月草々街頭に出るやうになるのはうれしい。

「改造」四月号で宣伝された文章とほぼ似たような内容であるが、再度に亘つての宣伝は、恐らく人々の記憶に鮮烈な印象を与えたことであろう。

また、この全集の宣伝は別の雑誌でも行われていた。昭和三年五月一日に発行された「文芸研究」には、「上田敏号」という特集号が組ま

れることとなる。その内容は大変豪華なものであり、様々な文学者たちが、故人となった上田敏を偲び、それぞれの立場から、故人を論じる文章を記載しているのだ。そんな「上田敏号」の目次に目を向けてみると、「挿絵」という欄に、「『神曲』 訳稿の一部」という見出しがあることを確認することができる。⁽²¹⁾ その見出しの頁を繰ってみると、『ダンテ神曲』の「訳稿の一部」である写真が掲載されている。⁽²²⁾ ここからさらに四頁後には、黒田正利がこの特集号で「上田敏先生とダンテ研究」という題で、上田敏によって訳された「神曲」について説明をされている。ここでは、未定稿版『ダンテ神曲』についても触れている。

以上のような宣伝文、特に「改造」に関しては、当時多くの文学者たちが閲覧していただけに、興味をそそられないわけがないであろう。そしてこのことは、「御近所の井伏さんに読んでもらって、評判がよい。元氣を得て、さらに手を入れ、消し去り書き加へ、五回ほど清書し直」⁽²³⁾ す程、精緻に「道化の華」という作品を組み立てていた太宰にとって、必要な資料となっていたと考えてみても、不思議なことではない。つまり、太宰が上田訳を参考にする背景には、このような雑誌で行われている宣伝を通しての影響関係があった、ということが考えられるのである。

嶋外訳と上田訳の両者を検討してきたが、この結果、『上田敏全集』第一巻の「神曲」の翻訳の方を太宰は参考にしたであろう可能性が、現在では一番高いと考えられる。

五、おわりに

以上が、今回の論証を通して導き出された結論である。なお、今回の作業はあくまで、作品世界の開示を目指すための基礎的な作業である。この作品のエビグラフには、一人称扱いにした銘文の翻訳を使用せずに、「ここ」という場を示した上田訳のものが使用されている。これは「道化の華」を見ていくうえで、これからの大きな課題となるものと思われる。今後は、今回出た結論をもとに、「道化の華」という作品をもう一度捉え直していくことが必要となるであろう。だが、この点については稿を改めて考えを述べたいと思う。

【注】

- (1) 「解釈と鑑賞」昭和六〇年一月
- (2) 「太宰治『道化の華』の構造」『人間文化研究科年報』五 平成二年三月
- (3) 『道化の華』の仕組みについて、『語文論叢』一六昭和六三年一〇月
- (4) 『文藝通信』第三卷第一〇号 昭和一〇年一〇月 但し引用は『太宰治全集』（平成一年六月 筑摩書房）による。
- (5) この「ドストエフスキイ論」に関しては、『太宰治全集』第一巻（平成一年六月 筑摩書房）山内祥史氏の「解題」で武者小路実光・小西茂也訳の『ドストエフスキー』（昭和五年一〇月）ではないかと言われてきた。このことに関しては、長部日出雄氏が『太宰治研究』九（平成一三年六月 和泉書院）の『道化の華』の現在性」でその正当性を認

める確認作業を行っている。

- (6) この「ここを過ぎて悲しみの市」という冒頭のエピソードに関しては初出のままの形で挙げている。ちなみに、初版も初出と同様の形式で書かれており、冒頭のエピソードに関して異同はない。

(7) 明治三十五年九月 春陽堂

(8) 平成六年五月 学燈社

(9) 平成八年五月 新典社

(10) 「信州白樺」(五一・五二合併号) 昭和五十七年一〇月

- (11) 佐藤泰正氏も『道化の華』をどう読むか 太宰治・その主題と方法
(一) 「日本文学研究」二二昭和六一年一月)で、この笠原氏の論文の説を引用している。

(12) 国立国会図書館(昭和三四年九月二五日 風間書房)

(13) 注(10)に同じ。

(14) 故上田敏 発行者 星野敬一『ダンテ神曲』(大正七年七月 修文館書店)

(15) 『上田敏全集』第一卷(昭和四年九月 改造社)の中の「神曲」を参照。

(16) ちなみに、この「太陽」第二四巻第九号の発行日は、未定稿版『ダンテ神曲』と同じ、大正七年七月一日である。

(17) 「太陽」第二四巻第九号(大正七年七月 博文館)の目次には、「故上田敏博士三周年」という特集欄が九六頁から一〇三頁まで組まれている。その中には新村出の「故上田敏氏のダンテ翻訳」という宣伝文が載せられている。その他には、藤代素人による「上田君の思ひ出」、北原白秋による「上田先生と私」、永井荷風による「コンセル・ルージの夜より」、成瀬無極による「千束の池と五重塔」という言及がある。
(傍線引用者)

(18) ちなみに、この宣伝文は、新村出の『典籍叢談』(大正一四年九月 岡

書院)に再録されることとなる。

(19) 上田敏の別号のことである。

(20) 「改造」四月号(昭和三年四月 改造社)

(21) 「文芸研究」上田敏号(昭和三年五月 文芸研究社)

(22) 注(21)に同じ。

(23) 注(4)に同じ。

(わたなべ ひろふみ

文学研究科国文学専攻博士後期課程)

(指導教授：坪内 稔典教授)

二〇〇二年十月十六日受理